

部員不足と怪我人で泣いた1年…

第36期 寺内浩一

昭和53年11月に、頼りになる個性の強い35期の先輩たちが引退されました。私達36期は、主将寺内浩一・副将有本大作・主務津田吉太郎・BKリーダー江沢宏之・マネージャー越山美喜と全員役付けという少数精鋭(ほんまかいな?)体制でスタートしました。

思えば1年の当初は、部員は10数人、マネージャーも3人もいたのに…。悔やんでも15人いないことには、試合はできません。そこで地味な基礎トレーニングと平行しつつ、部員勧誘作戦を展開しました。しかし何人かの部員は獲得したものの、15人は揃わず試合は新1年生(38期)の入部するまでお預けの状態でした。それでも試合の準備はしておこうということで、練習試合用のジャージを新調しました。

春になり新1年生が入部。3年生4人、2年生9人、1年生10数人とやっと15人になり春季大会迄約2週間、1年生を中心に基礎及び試合感などを身につけるなどいろいろやらなくてはとあせりつつ、あっという間に日時が経ち、今期初試合(練習試合も含めて)となる昭和54年4月29日をむかえました。それも公式戦(春季大会)、相手は都立日比谷高校。千歳は3年生4人、2年生7人、なんと1年生4人を含めたメンバーで予想通り?試合は終始日比谷高校ペースで、終わってみれば0対66という苦いスタートになりました。試合の反省としてRUGBYをもっと各人が勉強する事、又基礎を一からやり直すなど当り前の事があげられた記憶が残っております。

一学期は今後も1年生をメンバーに入れて試合を行わなくてはならないことを頭に入れて、試合は一試合消化してみっちり基礎練習を積み重ねました。

暑い夏、うれしくない夏、高校3年間は私としてはブルーな夏と当時思われましたが、今考えてみるととって

もすばらしく充実した夏と感じられました。まあ私の感想はどうでもよい事です。

さて問題の夏合宿がやってまいりました。この夏は多分千歳RUGBY部始まって以来の異常気象(合宿?)ではなかったと思われます。まず3年生の有本君が夏直前に部を去り、津田君が足の骨折で、まともに動ける3年生は2人。そんな最悪な状態で合宿に参加したのは3年生3人(1人骨折)、2年生7人、1年生8人でした。合宿はOBも含め毎年通り厳しい練習で特に基礎の反復でした。事件は合宿の最中、1年生の1人が東京へ夜逃げ?するという事から始まり、入院(2年生1人、1年生1人)と合宿の半ばには14人となり、合宿の最終日には2年生の1人が骨折とこの世の中の不幸がすべてやってきたという感覚でした。

そんな中、2年生を中心にだんだんとまとまりが出来、練習試合でもOBを1人か2人含んで今では出来ないような強敵?(城北、慶応、慶応志末高校など)に胸を借りて徐々にであるがうまくなってきた感覚が生まれました。

私の感想としてはこの夏はいろいろな事があり、又体調もベストではなく皆に迷惑をかけ、キャプテンとしては恥ずかしい夏を過ごした苦いものになりました。

夏合宿も無事に?過ぎ、全国大会予選の始まる9月になりました。秋初戦は文化祭での招待試合です。我々はこの時迄、まだ1勝もしておりませんでした。主務の津田君を中心に特に1年生に勝利の味を覚えさせるということで対戦相手の選抜には、かなり配慮がされたということです。

初勝利の相手は都立足立西高校。この時も夏合宿の後遺症でOB2人を助っ人としてメンバーを組みました。試合は34対0で完封勝ちでしたが中身は全く記憶がなく、

ただ初勝利のうれしさとこれから始まる全国大会予選へのはずみとなってくれればよいなという感じでしかありませんでした。

その後OB戦を含めて全国大会まで、2試合を消化して全部負け、全国大会も成城学園に8対17と負け、1回戦で私達36期の長くつらい1年が終わりました。

私はキャプテンとして何も出来ませんでした。特に2年生(37期の方々)に支えてもらって、後輩達には頭が上がりません。一年間部員不足と怪我人との戦いで満足に15人でRUGBYは出来ませんでした。我々36期は満足でした。千歳RUGBY有難う。

招待試合 昭和54年9月15日 於千歳高校

千歳高 34 0 足立西

○出場メンバー

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
石	中	神	籙	寺	木	野	矢	杉	木	米	田	鈴	大	江
瀬	村	保	田	内	口	島	野	本	本	谷	中	木	和	沢
○							○							
B							B							

(第 36 期
同期生からのことば)

校内ではさぼって帰る部員を捕まえ、教室では部費を集金し、部室では汚いとどなった鬼のマネージャー。でも楽しかったな。

越山美喜

青春のリグレットなのでしょうけれど、もっと自主的に個人練習をすべきだったと思います。ラグビーはタックルです。

津田吉太郎

いつも元気の江沢君でした。

江沢宏之

キャプテンとして悔いはないが、チームとしてとても残念な結果になりました。でも今に生きています。有難う千歳ラグビー。

寺山浩一